

攻撃の全貌を正しくとらえ 職場闘争と結合させ闘おう

〇〇闘争めぐる中央委の討論内容

ここに紹介する中央委員会の討論は、別項記事にあるように「〇〇闘争をどうするか」という問題をめぐって行なわれたものの中から、賛成と反対の意見を問わず、方針決定に当たって重要な問題提起の意味をもった意見を選んで、提供した。従ってこれは、討論のごく一部分ではあってもかなりその全貌を伝えているといえることができる。ぜひ、本紙前々号に掲載した「方針」と、本号の別項に紹介している補強修正を正しく理解するために、一読をおねがいしたい。

なお宮川組合長の幾たびか行われた答弁は、別項の補強修正にもなっているのに割愛した。

〇〇闘争は人間宣言 言々の闘いだ

堀田(本所) 第一に、われわれが反合理化闘争の頂点のものと位置づけられてきた〇〇闘争は、三井鉱山大規模にはじまった。だから働く者の命を守る、二度と犠牲者をださないための闘いだ。〇〇闘争は、明らかに資本の合理化攻撃が生み出したものだといえる。

〇〇患者を守る運動といふ〇〇闘争といふ、それは石炭政策をえさる闘いであり、働くための保安闘争の闘いであり、人間宣言の闘いであり、階級闘争であり、政治闘争である。このことの確信が大切だ。

第二に、前進するも妥協を許さず後退するも、組織内部の主体制確立がなくてはじめて可能であることを、確認すること。

第三に、対資本闘争を通じて法的権利の拡大につなげた面もあったが、その反面その後はほとんど要求がその枠内に押しこめられて、補償闘争でしかない型となった。やはり、職場での合理化と対闘争との結合がなかったのだ。このことは一般組合員の生活実態もよく見て、それと〇〇問題との関連を明らかにしながら、闘いをすすめるべきだ。

やっぱり金の問題が

古賀(港務) 問題点として職場で確認されたことは、①客観的・主観的状況をどうとらえるか、②何がこの闘争にならざるを得たのか、③今後どう闘うか——であった。

私としては、やはり資金をどうするか重大問題の一つだと思っている。総評・炭労なくしてこの闘いはなく、三池独走はあり得ない。

私たちは、命を守る闘いとして〇〇闘争を闘ってきたが、市民の間にはもう〇〇闘争は終わったのではないかと、この見方もある。それは、公害闘争と結合して闘うとき必ずや発展するだろう。もう三井独占への怒りを燃やそう。みんな独創的な闘いを組もう。闘いの中にこそ、妥協もあり得る。

なぜ〇〇患者の弱みばかりが目につくのか。患者とその家族の実態がほとんどつかわれていない。この点では、いまZD攻撃を浴びている職場の実態では、困難だ。昨午行なった総点検・総行動の経験を活かして、職場での抵抗闘争を強めよう。それが〇〇闘争を前進させる力でもある。

合理化攻撃の全貌を とらえて前進を

杉本(三川) 職場の討論はまた十分ではないが、しかし討論を重ねるうちにみんなの胸に、三十八年の爆発当時の怒りがよみがえってきた。

これまでは、中央依存の幹部闘争だった。組合員一人ひとりの英知をひきたして闘う姿勢がなかった。組合民主主義にもつながる問題だ。個人個人が考えて歩いてこそ、責任をもった闘いができる。

組合員一人ひとりの小さな要求が、組合長の耳にはいつていく体制づくりをめざして、提案は補強されるべきである。

五分間常会が定着し、 闘いはいまからだ

田中(四山) 〇〇闘争の階級の本質をどう深めるか、の問題を確認しながらも、結論は賛成となった。

今、提案をめぐって闘うという、職場の主体性はない。

問題点の一つに〇〇患者と一般組合員との間の断層があるが、モラルの問題は、〇〇患者だからとして外部から押しつけるべきことではなく、患者自身が考えるべき問題だ。要は〇〇患者は、患者でなく、全組合員がいかに労働者らしく生きるか、というところにこそモラルも生まれる。

いま私の職場で問題になっていることは——①繰りこみから昇進までの自分の仕事ぶりが、以前とかわってきているかどうか？
②繰りこみ時に携行していく〇〇マスクは、坑内で果してどうあつていくのか？
③新労組員の不満や要求を、どう掘り起こしてきたか？
④新労組員の仲間たちとの話し合い、でもって、闘いを組みあげる努力をやったかどうか？

残念ながら、私たちの職場が大きく前進したとはいえない。どうすればその弱点を克服できるか？

さいわい総点検・総行動月間の総括の中からひきたした結論として、五分間常会を定着化することができた。そこで私たちは、次のことを確認した——

①作業開始の際「絶対負傷しない」を確認し合うこと。
②職場の問題をただちにこたえて、組織化する。そうすることによって、ZD運動を無力にしていく。

③前日の問題をこたえて、行動を組織化する。④五分間常会を通じて、組合のあらゆる情報を伝達する。

こうして、闘いを発展させる努力をやっている。

正しい位置づけを

沖(三川) 第一に、七級認定とひきかえに

争いを残さないといっているところがやっぱり問題。それこそ、軍国主義再編成下の合理化攻撃の一つとしてとらえるべきだ。

いま、総評の一部の民間単産の間からさえ「公害闘争はやるべきでない」との声が出ている。まさに独占資本の攻撃方向を示している。いまこそ三池労組として、しっかりと命を守る闘いを位置づけねばならぬ。命までは売らない、が三池の信条のはずだ。

大野(三川) 昨午のボーナスのとき、新労組員の間では「あいつは、十二万円もあったばん」「そげんあいつがあつたかん」と、問題になっていた。それと同じように私たちの間からも「〇〇患者が、いくらいくらもあつた」「わあ、俺のより多かじなっかん」との声が出ている。

いったい〇〇闘争とは何なのか、といいたい。私としては、三人の〇〇患者が坑内にさかっている。坑内にさかっているようになった、と大よろこびだ。自動車を乗り回す、バイクを買う。ようこんでやるのではないか。

三池闘争以来人間が
ダメになった

中(原三川) ある日、繰りこみ中一職制がいった——「東北線で起きた、酔っぱらい運搬はひどい。もっと労働者は、ビシヤツと自分の責任を果たさんなら」

また自動車の免許を受けにいったところ、警察の交通主任がいった——「このころは人間の心がダメになったが、赤旗が立ったりするからだ。三池闘争以来、こんな人間がふえたのだ」。

なんでもかんでも、労働運動のせいだとしてきている。ここに体制側の労働者に対する姿勢を見るとき、いまの情勢、合理化攻撃はそこから出てきているのだ。

日炭高松の不安

山本(本所) 七級問題で政治的解決をはかるという、それよりもいよいよはげしさを加えている石炭政策・客観的な情勢の中でどうすべきか、を見きわめるべきだ。

いま、日炭高松に閉山合理化攻撃がきているが、三池で七級問題を押し出してきた手は、その攻撃とまったく同じものだ。

閉山合理化にゆれる

山本(本所) 七級問題で政治的解決をはかるという、それよりもいよいよはげしさを加えている石炭政策・客観的な情勢の中でどうすべきか、を見きわめるべきだ。

いま、日炭高松に閉山合理化攻撃がきているが、三池で七級問題を押し出してきた手は、その攻撃とまったく同じものだ。

何のための印鑑か

大西(三川) ついに、三日前のこと、〇〇守る会の領収証を家の机の上に置いていたところ、それを見て子どもがいった——「お父さん、あの爆発がなかったなら、この印鑑もいらんだ」

これはほんとうに若松へいってくれ」と。二年した。閉山。

妻がおり、子どもがいる。仲間のうちには、カタワ者もいる。これからどうすればよいか。

私たちはよそのヤマの闘いとき、何もしてやっていない。いまこそ三池の人たちについていよう。言葉もなし。ただ組合の連中、これまでタダ飯食わせてきたことを思うと残念だ」

いまこそ向こうの攻撃の本質をいまいにいては、補償闘争としてさへ闘えない。まして〇〇闘争は命を守る闘いだ。原点に立ちかえって闘ってゆこう。